国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
令和元年9月1日発行　第43巻第9号通巻第504号

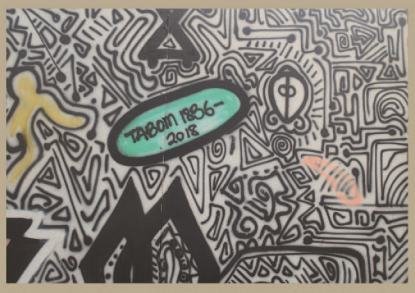
月刊みんぱく

2019 9月号

特集

奴隷展示は問う

奴隷展示を介した過去、現在、そして未来
鈴木英明
リヴァプールの国際奴隷博物館
井野瀬久美惠
アクラの「ブラジル人」
鈴木茂
スリナムの奴隷廃止記念碑をめぐって
吉田信



軟骨魚類との関わり

西田 清徳

フランスの海洋生物学者ジャック・イブ・クストーの書籍で軟骨魚類（サメ・エイ・ギンザメ）に出合って以来、四六年間その探求に関わってきた。図鑑や海洋冒険小説、映画までサメやエイの情報を手当り次第に集め、大学では軟骨魚類の系統分類学を学んだ。系統分類学は対象とする生物群がいつ頃、どのような仲間から分かれ、彼らがどのように適応して多様な種を生み出してきたのかを解き明かす。近年は遺伝情報の解析技術が飛躍的に進歩して、その強力な武器となっているが、四半世紀前は外部形態、骨格や筋肉、血管や神経などの比較に基づく解析が主流であった。そのため、先ず標本が必要だが、大型種が多く漁獲量も少ない軟骨魚類の標本は大学や博物館にも少なく、漁港に水揚げされる種類も僅かであった。

この状況を打開してくれたのが水族館の存在で、系統解析のキーとなるような大型のサメやエイが目の前の水槽で暮らしている。しかも、サメが口を突出させて大きな餌を食べ、エイが胸鰭を波打たせながら泳ぎ、オスがメスに咬みついて（オスの歯がメスより尖っている場合もある）交尾をしたり、卵や子を産んだりすることもある。そこには、標本観察だけでは判らない、彼らの「生き様」が感じられた。

この体験から、軟骨魚類は系統分類の対象だけでなく、四億年の進化の歴史を語ってくれる特別な存在となった。多くの方々にサメやエイの生物学だけでなく生き様も伝えるため、ヒトとの関わりも含めたもっと多くの事を知りたいと感じ、ヒトと軟骨魚類の関わりを探るようになった。すると古来より、サメの歯がメリケンサック（手につけてパンチ力を強化する武器の一種）に埋め込まれ、エイの尾棘（尾の付け根にある毒トゲ）が槍先に利用されていたり、サメの頭部を模した被り物が祭事に使われたり、痔疾を治す祈願の絵馬にアカエイが描かれていたり、日本だけでなく世界中で興味深い事例が見つかり始めた。

サメやエイのような海の生き物と、食料や道具としての物質的な利用価値以外の関わりをもつのは、私たちの心の中に生き物に対する「興味」「驚異」「畏敬」など多様な感覚が、進化の記憶と共に残されているからだろうか。

八月二九日から国立民族学博物館で開催されている特別展「驚異と怪異――想像界の生きものたち」では、ヒトと軟骨魚類との関わりから想像された「天狗の爪？」「人魚の財布？」「宇宙人？」も展示されるのでご覧いただきたい。

プロフィール
1958年大阪府生まれ。海遊館館長。北海道大学大学院水産学研究科博士課程修了、水産学博士。1989年から海遊館の建設計画に携わり、沖縄県からジンベエザメの長距離輸送を成功させた。1997年に高知県に海洋生物研究所を設置、イトマキエイ類、オナガザメ類の採食方法を解明。2007年より現職。著書には『日本の水族館』（東京大学出版会）、『以布利 黒潮の魚』（大阪 海遊館）等多数。

月刊 みんぱく
9月号目次

1 エッセイ 千字文
軟骨魚類との関わり
西田 清徳

特集 奴隷展示は問う
2 奴隷展示を介した過去、現在、そして未来
鈴木 英明
4 リヴァプールの国際奴隷博物館
井野瀬 久美惠
6 アクラの「ブラジル人」
――ブラジル・ハウスを訪ねて
鈴木 茂
8 スリナムの奴隷廃止記念碑をめぐって
――スリナムに奴隷博物館がないのはどうして？
吉田 信
10 ○○してみました世界のフィールド
サンゴの海で漁師になる
小野 林太郎
12 みんぱく Information
14 想像界の生物相
刺繍に見るミャオ族の宇宙
横山 廣子
16 みんぱく回遊
みんぱくレプリカめぐり
末森 薫
18 シネ倶楽部 M
100年前のボクシング
――「チャップリンの拳闘」
樫永 真佐夫
20 ことばの迷い道
真実はふたつ？
肥後 時尚
21 次号予告・編集後記

特集

奴隷展示は問う

奴隷展示を介した過去、現在、そして未来

鈴木英明（すずきひであき）　民博グローバル現象研究部

世界を見渡せば、奴隷制や奴隷交易に関するモニュメントや博物館、建造物（これらを本特集では「奴隷展示」とよぶ）があちらこちらにある。本特集では、それらをめぐって今、世界で何が起きているのかを紹介しながら、それらがわたしたちに発信するメッセージは何か、一方でそこで語られていないこととは何か、そこから人類規模で未来がどう展望できるのか、各地の事例から考えてみたい。

奴隷展示の世界的拡がり

近年、世界各地で奴隷制や奴隷交易の歴史が掘り起こされ、それがモニュメントや展示、建造物などの形で具象化している。例えば、ユネスコの世界遺産のうち、奴隷制や奴隷交易、あるいはその廃止に関連するものは、現在、二七を数える。そのうちの一七が二〇〇〇年以降に指定されたものである。また、本特集でとりあげているブラジル・ハウス（六頁）など、世界遺産以外でもモニュメントや展示が急増している。その背景としては、二〇〇一年のダーバン会議宣言を契機に、奴隷制、奴隷交易が人類に普遍的な価値とされる「人道」に対する罪として世界的に理解されていったことを挙げることができる。また、奴隷制や奴隷交易の歴史を世界規模で掘り返し、人類の歴史に位置づけようとして、一九九四年から二〇年間続けられたユネスコの「奴隷の道」プロジェクトの影響も無視できない。

日本で生活をしていると、奴隷制や奴隷交易は何か時間的な感覚からも、距離感からも、遠い彼方のような気がしてしまう。しかし、二〇一四年のアカデミー賞受賞作「それでも夜は明ける」のように、アメリカではそうした過去はポピュラー・カルチャーのなかでも反芻（はんすう）され続けているし、カリブ共同体の補償委員会が奴隷制や奴隷交易の歴史を踏まえ、巨額の補償を旧宗主国らに求めたニュースも記憶に新しい。奴隷制や奴隷交易を切り離すのではなく、今を生きる自らと直結する過去として想起する人びとがこの地球上には多くいる。

タンザニア・ザンジバル島の英国教会敷地内（かつての奴隷市場跡）に設置された奴隷交易のモニュメント（2005年）

奴隷制、奴隷交易の偏在？

ところで、奴隷制や奴隷交易といえば、どういう光景が思い浮かぶだろうか。ぎゅうぎゅうで阿鼻叫喚（あびきょうかん）の奴隷船や、自己の意思を奪い取られ、鞭（むち）打ちや拷問にかけられ泣き喚（わめ）く奴隷、それらがイメージの最大公約数ではないだろうか。だがそれはある事例では正しく、別の事例では正しくない。一九世紀インド洋の奴隷交易では一隻あたりの積載奴隷数は五人以下が大多数を占めていた。また、世界の多くの奴隷制では、奴隷が奴隷を所有することも特別ではなかった。奴隷制や奴隷交易はわたしたちが想起する以上に多様性に満ちている。

その一方で、こんにち林立する奴隷展示では、驚くほど類似したメッセージが繰り返される。例えば、それらで必ず登場するのは、奴隷がつけさせられていたとされる足枷（あしかせ）や首輪で、焼きごてもめずらしくない。そうした画一的な展示物も、やはりある部分では正しく、別の部分では正しくない。また、奴隷展示の地理的分布に偏りがあるのも明らかである。ユネスコの世界遺産のうち、奴隷制や奴隷交易、あるいはその廃止に関連する二七のサイトをプロットした下の地図を参照すれば、それらが環大西洋地域とインド洋岸アフリカ地域に見事に集中している。このことは、奴隷制や奴隷交易がこれらの地域だけに偏在したことを意味しているのでは決してない。では、何を意味するのだろうか。

歴史が想像／創造されていく場としての奴隷展示

奴隷展示を観に来た人びとは、そこにあるモノやそこで語られるコトを拠りどころにして、奴隷制や奴隷交易を心のなかに描いていく。つまり、そこは歴史が想像／創造されていく場なのである。ダークツーリズムということばが人口に膾炙（かいしゃ）したこんにち、そこで想像／創造された歴史の発信力は強い。例えば、セネガルのゴレ島はフランスの奴隷輸出拠点として広く知られ、やはり世界遺産になっているが、この島の「奴隷の館」という、かつて奴隷が集積されたとされる商館では、往時の様子を悲劇的に語る語り部にヴァカンス風情の多くの観光客が眉をひそめて耳を傾けていた。そうであるならば、こうした歴史を想像／創造する場としての奴隷展示は、どのようにして生み出されているのだろうか。そこでは、何が語られ、何が語られないのだろうか。そして、その語りは誰が何のために発しているのだろうか。

本特集では、環大西洋――具体的にはイギリス、ガーナ、そしてスリナムとその宗主国であったオランダ――を舞台に、過去の奴隷制や奴隷交易を誰が、なぜ、どのように表現しているのか、あるいはしないのかについてとりあげてもらった。それぞれの事例で、どのような現在がどのような過去と結びつきながら双方を往還し、歴史が想像／創造されていくのか。果たしてそれらの奴隷展示をとおして、人類として奴隷制や奴隷交易の過去と向き合えるのか、否か。できないのであれば、何が問題なのか。こうした点を是非、読者には考えてもらいたい。

ガーナ・エルミナ城の奴隷の留置所に置かれた花輪とTシャツ。アメリカから祖先を探す旅をしてきた一族が手向けていったもの（2018年）

右：ゴレ島の船着き場付近に置かれた「奴隷制からの解放の像」。カリブ海にある群島グアドループから「アフリカの兄弟」に寄贈されたと説明されている
左：ゴレ島の「奴隷の館」を訪れる観光客（ともに2018年撮影）

リヴァプールの国際奴隷博物館

井野瀬久美恵（いのせくみえ）　甲南大学教授

イングランド北西部、マージー川河口の港町リヴァプールは、一八世紀半ばごろから、西部のブリストルに代わって大西洋奴隷貿易（いわゆる三角貿易）の主役に躍り出た。一八四六年に開設され、世界初の耐火性倉庫を誇るアルバート・ドックは、時の君主、ヴィクトリア女王の夫君にちなむ命名である。その後、海洋船の巨大化でドックとしての機能を果たせなくなり、一九七二年に閉鎖されたが、八〇年代の再開発で港湾交通局の建物がマージーサイド海事博物館として生まれ変わり、都市再生のシンボルとなった。国際奴隷博物館は、この海事博物館の四階にある。

マージーサイド海事博物館（2012年）

観光客でにぎわうマージーサイドの博物館群。左端に見えるのが、国際奴隷博物館のある海事博物館（2012年）

「負の遺産」を未来戦略に

一九八七年、海事博物館で初めての展示、「リヴァプールの歴史」がおこなわれたとき、市民から相次いだのは「重要な部分が欠落している」との批判であった。それを受けて、一九九四年、博物館地下一階に「人間の尊厳に反する大西洋奴隷貿易」という特別展が組まれ、以後常設化される。そして、イギリス議会で奴隷貿易廃止法案が通過（一八〇七年三月）して二〇〇年の節目を迎えた二〇〇七年八月二三日、常設展は「国際奴隷博物館」という独自の名称をもつに至った。

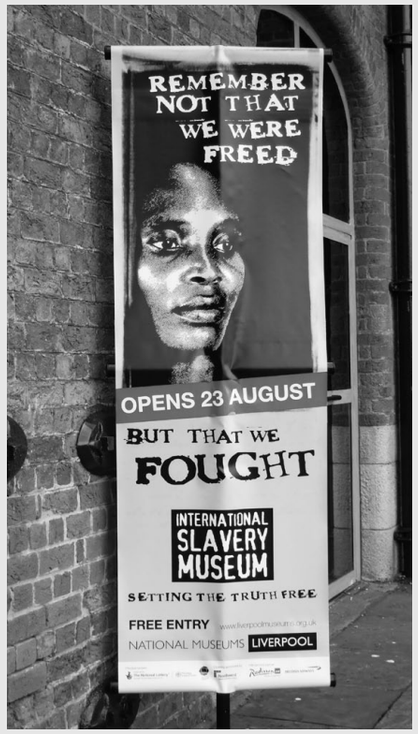
その間、リヴァプール市は、一九九九年一二月末、この過去を正式謝罪するとともに、二一世紀に続く都市計画にこの「負の遺産」を織り込んだ。二〇〇四年、アルバート・ドックを含むリヴァプール旧市街（六街区）は「海商都市」として世界遺産に登録され、二〇〇八年の「ヨーロッパ文化首都」にも選ばれた。改修、新設された博物館群は観光の中核を担っている。

入口から放たれる違和感

建物を共有する海事博物館では、第一次世界大戦でアメリカ参戦の引き金となったとされる客船ルシタニア号の沈没（二階）やリヴァプール船籍タイタニック号の悲劇（三階）の展示が目玉となっている。その足で四階に進んだ来館者の多くは、国際奴隷博物館の入口で、一瞬たじろぐように見える。この違和感は何だろう、と……。それは、照明の暗さのせいばかりではないだろう。入口には、「アフリカの物語」というタイトルのあとに、こんなことばが続く。

「大西洋を渡る奴隷の物語は、人間の本質的かつ悲劇的な物語であり、それは、語り、語り直され、けっして忘れられてはならない。この物語の中心はアフリカとその人びとにある」

この明快な主張は、博物館を構成する三つのパートでも確認できる。第一部「西アフリカの生活」では、ヨーロッパ人がやってくる一五世紀以前、豊かだった西アフリカの文化が、織物や彫刻、楽器、アクセサリーといったモノ、移築された住居などで表現される。第二部「奴隷と中間航路」では、その文化を破壊した奴隷貿易の実態が、年代ごとの奴隷貿易ルートを示すタッチパネル、奴隷船内の再現ビデオ、使用された手錠や足枷などで示されるとともに、奴隷村を再現した模型では、アフリカの習慣や文化が維持されたことが強調され、解放運動へつながるさまが描かれる。この奴隷自身の主体性こそ、現代に残る人種差別や奴隷制との闘いをテーマとする第三部「奴隷制の遺産」のメッセージでもある。キング牧師やネルソン・マンデラら有名なアフリカ系指導者の名文句が、この空間のあちこちで、異口同音に、このメッセージを伝えている。



開館当時の幟。「We」の使い方に注目されたい（2007年）

「われわれ」の主体性

奴隷自身の主体性重視の姿勢は、開館日の設定に明らかである。八月二三日は、フランス革命期の一七九一年、フランス領サン・ドマング島西部で奴隷大反乱が起きた日であり、それは一八〇四年、黒人初の共和国、ハイチ独立の起源とされる。この日をユネスコは「奴隷貿易とその廃止を記念する国際デー」に制定し、一九九八年以降、全世界に実践をよびかけてきた。

開館を宣伝する幟（のぼり）にも館内展示にも、目立つのは「われわれ（we, us）」ということばだ。博物館の対象地域は大西洋上を離れることはなく、アフリカ系とかかわりが薄い（と思われる）他の人種・民族関連の差別や人権侵害にはほとんど言及がない。「国際」を看板に掲げながら、ここで扱われる奴隷制は限定的である。共有すべき主体性が誰のものかは明白だ。それゆえに、「われわれ」にうまく入ることができない来館者は、まずは「他者」としての違和感を抱えてしまうのだろう。

俳優兼ダンサーとしてイギリスで成功したジャマイカからの移民、エルロイ・ジョセフ（1939〜97）の追悼展示では、西アフリカの伝統音楽との関連が強調されている（2007年）

加えて、博物館全体にジェンダーの視点はほとんど認められない。例えば、北米大陸と異なり、奴隷人口の増加が見られなかったジャマイカでは、「奴隷の子は奴隷」という子どもの未来を案じて、堕胎する女性が少なくなかった。妊娠間隔や子育ての期間にも、アフリカの慣習が認められる。ヨーロッパ人到来以前のアフリカ社会に存在、内在した（だからこそ、白人不在の奴隷村に踏襲された可能性が高い）現地の階層関係はじめ、政治的・経済的・文化的な権力構造も見えないままである。

「アフリカの物語」という明快なことばによって隠蔽（いんぺい）されているものとは何か。この博物館で除外が許される存在、許されないものとは何なのだろう。観光化が進む博物館群のなかで、国際奴隷博物館が放つ違和感自体が、ある種のメッセージ性をはらんでいる。それをどう受けとるか――それこそ、「われわれ」の問題である。

アクラの「ブラジル人」――ブラジル・ハウスを訪ねて

鈴木（すずき） 茂（しげる）
名古屋外国語大学教授

西アフリカの「ブラジル人」

ブラジルの社会史家ジルベルト・フレイレは、一九五〇年代の初め、ある雑誌に寄稿した文章のなかで、『千一夜物語』の英訳者としても知られるイギリス人探検家リチャード・バートンはじめ、一九世紀に現在のナイジェリアやベナンを訪れたヨーロッパ人が、「生活習慣や好み、果ては悪癖にいたるまでブラジル化、バイーア化、ポルトガル化した（中略）『ブラジル人』と呼ばれる人々」の存在を書き残していることに注目している。ブラジルから西アフリカへ帰還した解放奴隷は、ブラジル北東部バイーアの出身者が多く、奴隷としての経験から、あらたな言語（ポルトガル語）、宗教（カトリック）、生活習慣（食事、衣服、住居）を獲得し、それを拠りどころとしてアイデンティティを構築していたことが伝わってきて興味深い。このフレイレの文章はピエール・ヴェルジェの写真とセットで掲載されているが、バイーアに定住したこのフランス人写真家は後に、大著『一七世紀から一九世紀のベニン湾とバイーア間の奴隷貿易』（パリ、一九六八年）を発表する。

「アグダー」と「タボン」

ナイジェリア、ベナン、トーゴの「ブラジル人」は別名「アグダー」ともよばれる。ベナンの奴隷輸出拠点ウィダ（ポルトガル人はアジュダーとよんだ）に由来するとされる。一方、ブラジルから帰還した解放奴隷の一部はガーナの首都アクラにも定住し、旧市街の再開発とともにその子孫が近年注目を浴びている。これらの人びとは「タボン」とよばれ、ポルトガル語の「タ・ボン」（「それで結構」の意）に由来するとされる。現地語が理解できない帰還者たちは、周囲の人びとに何を言われても「それで結構」を繰り返したからだという。

上：ブラジル・ハウス。面している通りは「ブラジル・ストリート」
下：ブラジル・ハウスの裏からはジェームズタウンの旧港が臨める
（すべて2018年撮影）

アグダーとタボンはその起源に共通点が多い（タボンの祖先はバイーアからナイジェリアのラゴスを経由して来たムスリム奴隷であったという説が有力である）ものの、大きな違いも見られる。可視性である。アグダーは、トーゴ初代大統領シルヴァヌス・オリンピオ、ベナン元大統領ニセフォール・ソグロなど有力な政治家や経済人を多数輩出し、ポルトガル系の姓を名乗り続けている一族も少なくない。現在ではほとんど使われないが、一九五〇年代にヴェルジェがラゴスやウィダを訪れたころには、まだポルトガル語を話す子孫がいたという。これに対し、タボンは長く「忘れられた」存在であり、早くからポルトガル語は使われなくなり、名前もガーナの公用語である英語式のものに変わってしまっている。

奴隷貿易の記憶と展示

二〇〇七年一一月、アクラ旧市街ジェームズタウンの一角に「ブラジル・ハウス」が開館した。二〇〇一年、ユネスコが最初の帰還奴隷の一人、マハマ・ナスゆかりの家屋の保存・修復をブラジル政府に提案し、ガーナ政府の旧市街再開発計画の一環として、ブラジルの建設会社と塗料会社が資金提供して実現した。タボンの歴史を記憶し、ガーナとブラジルの友好を深めるために設けられた施設である。どっしりとした立派な二階建ての家屋で、二〇世紀初めに建て直したものという。残念ながら、改装中とのことで、中庭の壁のグラフィティ以外、内部の展示は撤去されて見ることができなかった。

一九九四年にユネスコが「奴隷の道」プロジェクトを創設して奴隷制と奴隷貿易の記録と記憶の掘り起こしを進めてきたことも手伝い、大西洋奴隷貿易についても、これまで注目されていなかった史実にあらたな光が当てられるようになった。解放奴隷の帰還者はそのひとつである。ただし、当然ながら、それは単なる新事実の発見に止まらない。例えば、南大西洋では一九世紀半ば過ぎまで奴隷貿易が続いていたが、多くの帰還者は生まれ故郷へは戻らず、沿岸部の商業都市に留まって、奴隷貿易を含む商業に従事したとされる。奴隷を所有する者すらいたことも明らかになっている。

奴隷貿易に関する世界遺産は、今やどこも多くの観光客を集めるようになった。二〇〇五年には、ブラジルのルーラ大統領がタボンの人びとのコミュニティを訪問し、奴隷貿易の遺産が外交にも役立つことを証明した。大西洋奴隷貿易とは何であったのか、改めて問われている。

上・下：ブラジル・ハウスの中庭の壁に描かれたグラフィティ

ブラジル・ハウスのガイドの女性（左）と筆者。手に持っているのは2016年制作のインタビュー集

スリナムの奴隷廃止記念碑をめぐって——スリナムに奴隷博物館がないのはどうして？

吉田（よしだ） 信（まこと） 福岡女子大学准教授

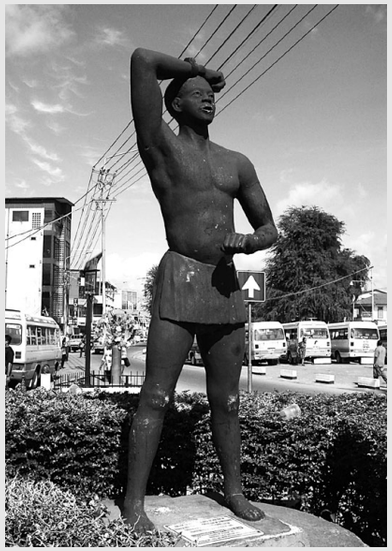
多民族国家スリナム

世界に関心をもつ『月刊みんぱく』の読者にも、スリナムは馴染（なじ）みのない国かもしれない。ブラジルの北に位置し、東にフランス領ギアナ、西にガイアナ（旧英領）に挟まれた人口五六万ほどの南米大陸の国である。一六六七年から一九七五年の独立までオランダの植民地であり、おもに砂糖プランテーションの労働力としてアフリカ大陸から連れてこられた奴隷を軸に、社会が形成された歴史を有している。奴隷制廃止後は、同じオランダの植民地であり人口稠密（ちゅうみつ）なジャワ島からジャワ人（一部華人を含む）、英国との協定により英領インドからヒンドゥー教徒（一部ムスリムも含む）が代替労働力として連れてこられた。

ママ・スラナン。1965年ユリアナ女王（当時）臨席のもと除幕式がおこなわれた

二〇一四年の人口統計によると、スリナムの主要な民族集団は次のとおりである。アマゾン流域に居住する先住民（アメリンディアン）四パーセント、アフリカ系スリナム人として括られる集団のうち、奴隷の子孫および混血（クレオール）一六パーセント、奴隷制下で逃亡を図り内陸部に独自のコミュニティを築くようになった「マルーン」とよばれる逃亡奴隷の子孫が二二パーセント、ジャワ人が一四パーセント、英領インドを出自として「ヒンドスタン」として括られる集団が二七パーセント、他に近年スリナムに流入してきたハイチ人やブラジル人、さらに華人（改革開放後の移住者を含む）等の集団が一三パーセントを数えている。

スリナムの多様な民族構成を可視化したものとして有名なのが、首都パラマリボの「ママ・スラナン」（スリナムの母）とよばれる像である。これは、スリナムを擬人化した母子像で、一九六五年に建立された。ママ・スラナンが抱く五人の子は、先住民、クレオール、ジャワ人、ヒンドスタン、華人、を象徴している。これ以外にも奴隷制廃止一〇〇年を記念して一九六三年に設置された奴隷解放記念碑やヒンドスタン移民の記念碑、あるいは同じ通りに並んで建つモスクとユダヤ教の教会シナゴーグなど、パラマリボを少し散策すればそこかしこで民族（宗教）の多様性をうかがいしることができる。



奴隷解放記念碑。パラマリボでもっとも有名な記念碑であり、奴隷制が廃止された7月1日には毎年この像の周辺でフェスティバルが開催されている（2005年）

クレオールとマルーン

このような多様性は、国立スリナム博物館の展示区分にも反映されている。博物館は、華人、マルーン、クレオール、ヒンドスタン、先住民、ジャワ人、ヨーロッパ人という民族別の展示ブースを設けており、どれかひとつの民族を前面に押し出す展示構成をとっていない。奴隷の博物館を作ることはクレオールとマルーンを他の民族よりも特別な集団として認めることを間接的に意味してしまうからである。しかも、このクレオールとマルーンというふたつの集団も、じつは一枚岩とはいえない状況にある。

スリナム博物館。かつての要塞「フォート・ゼーランディア」を博物館に転用している（2005年）

もとは同じ奴隷とはいえ、クレオールは奴隷解放によって初めて自由を手に入れた。これに対して、マルーンは奴隷制廃止以前に死の危険をおかして内陸部へ逃亡を図ることで自らの自由を手に入れた存在である。しかし、現在のマルーンは微妙な立ち位置にある。独自のコミュニティを維持してきたマルーンは、結果として教育を受ける機会に恵まれず、市場経済の周辺に置かれ貧困が著しい。

では、クレオールとマルーンからなるスリナムのアフリカ系住民が、奴隷の子孫として一体のアイデンティティを要求できる機会はないのだろうか。奴隷博物館の設立による一体のアイデンティティを醸成する機会は、現状では難しいだろう。だが、かつての宗主国オランダ本国に目を転じれば、状況は異なってみえる。

奴隷制の過去と継承

オランダでは、旧西インド植民地を構成していたスリナムおよびアンティル出身者たちが、奴隷制廃止の日である七月一日にアムステルダムで毎年フェスティバルを開催してきた。一九九九年には彼らの作る複数の団体が合同でオランダ政府に奴隷制の過去に対する謝罪と補償を求める動きを活発化させた。この動きは、二〇〇一年に開催が迫ったダーバン会議（国連反人種主義差別撤廃会議）を視野に入れたものだった。

オランダ政府はダーバン会議で奴隷貿易と奴隷制の過去に対する「深い謝罪」を表明（補償は拒否）し、翌二〇〇二年には追悼記念碑の建立と啓発のための国立研究機関（NiNSee）の設置を閣議決定する。記念碑は、スリナムを代表する彫刻家エルウィン・ド・フリースが手がけ、スリナムとアンティル出身者が多く居住する地区にあるアムステルダム東公園に設置され、その年の七月一日ベアトリクス女王（当時）と首相の列席のもと追悼式典と除幕式がおこなわれた。

2018年に惜しくも逝去したエルウィン・ド・フリース氏（右）と筆者。隣に見えるのは彼がデザインした記念碑の原型（2005年）

奴隷の博物館ではないものの、この国立研究機関は彼らの要求を政府が認めた結果であった。しかし、奴隷制が展開された旧植民地ではなく、かつての宗主国を舞台に施設が作られた事実に、宗主国と植民地との根深く解き難い関係を感じてしまう。世界史的出来事である奴隷制の過去を、旧宗主国の枠組みを超えて共有する試みは実現するのだろうか。カリブ諸国からなる「カリブ共同体」（カリコム）でも奴隷制への補償を旧宗主国に対して求める動きが活発になっている。奴隷制の過去は未来にどのように継承されていくのだろうか。そして、民博を含む世界の博物館は、そこにどのようなかかわり方をしていくのだろうか。

○○してみました世界のフィールド

サンゴの海で漁師になる

小野林太郎
民博 人類文明誌研究部

調査中に訪ねた海サマの一家と一緒に
（右端が筆者、掲載写真はすべて 2002 年に撮影）

ボルネオ島の先史時代の遺跡から出土した魚の骨。分析によりその多くが遺跡周辺のサンゴ礁に生息している魚たちであることが判明したが、それらはどうやって捕獲されていたのだろう。素朴な疑問から、筆者は遺跡近くに住む海民サマの村に住み込み、漁三昧の日々を過ごした。

遺跡から出土した魚骨

ボルネオ島は世界で三番目に大きい島である。マレーシア領となる北部沿岸には、東南アジアのなかでも重要な新石器時代の遺跡がある。遺跡からは土器や石器とともに、大量の魚骨が出土した。当時の人びとが周りの海で捕獲し、遺跡までもち込み、おそらくは食べた魚だろう。残された骨は、いわば彼らの「食べかす」である。博士論文執筆の一環として、遺跡から出土したこれらの魚骨を分析したわたしは、その多くが、遺跡周辺で今も捕獲されているサンゴ礁に生息する魚たちであることをつきとめた。

サマ漁師との出会い

遺跡から出土した魚骨を同定するには、何より比較するための現生標本が必要になる。しかし当時、二〇年ほど前のマレーシアには、魚骨の現生標本はなかった。そこでわたしは遺跡に近いセンポルナという港町の魚市場で、毎日のように魚を買い漁った。その多くはセンポルナの沿岸に発達したサンゴ礁の海で漁獲された、色とりどりの魚だった。これらを同定・計測した後、身の部分は美味しくいただき、魚骨標本を作る。そんな日々を繰り返すうちに、気がつけば魚市場の面々とも顔見知りになり、市場へと魚を運んでくるサマ人（バジャウ人という他称でも知られる）の漁師たちとも仲良くなった。

数カ月かけて約二〇〇個体の魚骨標本を作製したわたしは、それをもとに遺跡から出土した魚骨の分析をおこなうことができた。結果は先述したとおりで、その多くがセンポルナの魚市場に並ぶ魚と同じく、サンゴ礁に生息する魚たちだった。そのとき、ピンときた。市場に並ぶ魚たちがどのように捕獲されているかを調べれば、先史時代の人びとがどうやって魚を獲っていたかもわかるのではないか。ついでわたしの頭に浮かんだのは、センポルナの魚市場で出会ったサマ人の漁師たちの姿だった。

センポルナの港と魚売り

サマ漁師とサンゴの海へ

こうしてわたしはセンポルナの町に近い離島にあるサマ人の村に住み込むことになった。サマ人は東南アジア島嶼部の各地で、おもに海産物の捕獲や運搬・販売に携わり、海民として知られる民族でもある。センポルナには、おもに沿岸に暮らし、現在では多様な生業を営む陸サマとよばれる人びとと、潮間帯に杭上家屋を建て、移動性の高い暮らしを営む海サマとよばれる人びとがいる。このうち行政の管理下にある村の多くは陸サマの村で、人口的にも彼らが多数派だった。成り行きで、わたしも陸サマの村で暮らすことになり、そこで約半年を過ごした。

陸サマとはいえ、彼らも海民である。村の家々はいずれも海に面し、潮が満ちれば、台所から海に向かって張り出したベランダから舟に乗り込み、そのまま海に出られる。漁は夜におこなわれるものも多く、昼夜に関係なく、わたしは彼らと海へ出続けた。彼らが漁に使うシンプルな木造の舟には屋根もない。真昼の漁では何時間も太陽の熱を浴び、肌が痛む。しかし海では風もとおりやすく、それほど暑さは感じないから不思議なものだ。

陸側から見た陸サマの村と家々

浅いサンゴ礁の海での網漁には子どもも参加する

マレーシア
センポルナ

サンゴの海で漁師になる？

サマの漁は、その多くが浅く、海底が見えるサンゴの海を漁場とする。ゆえに女性や子どもが漁に参加することも多かった。しかし侮るなかれ、子どもたちの釣り技術はかなり高く、大人顔負けだった。もちろんわたしにはまったく勝ち目なし。おもに竿を使わず手で釣る釣り漁のほか、追い込み網漁や水中銃を使う潜水漁など、いろいろな漁に挑戦したが、もっとも印象に残っているのは、凪の夜におこなう突き漁だ。舟の舳先にケロシンランプを設置し、その明かりで船上からヤスでサンゴの海を泳ぐ魚やイカを突く。舟の移動はヤスか竹竿でおこなう。水面下を泳ぐ魚を一瞬で突くのは簡単そうに見えるが、じつはかなり技術がいる。疲れると突き役を交代し、船尾で寝転んだりできるのだが、そのときに見上げた星空の美しさは今でも忘れることができない。

サンゴの海でのサマ漁師との体験は、その後のわたしの研究においてとても貴重な経験となった。しかしそれは、自分がいかに漁師に向いていないかを自覚する体験でもあった。海に出るのは大好きだが、わたしが漁師になることはもうないだろう。以来、魚は食べる、観る、骨を愛でる、がわたしの専門となったのである。

みんぱく Information

観覧料改定のお知らせ

2019年6月6日(木)より、本館展示観覧料を左記のとおり改定いたしました。なお、特別展観覧料はその都度、別に定めます。何卒、お願い申し上げます。

一般	大学生	高校生以下
580円	250円	無料

各種割引等につきましては、みんぱくホームページをご覧ください。

特別展
「驚異と怪異 ――想像界の生きものたち」

なぜ人類は、この世のキワにいるかもしれない不思議な生きものを思い描き、形にしてきたのか？ 奇妙で怪しい、不気味だけどかわいい、世界の霊獣・幻獣・怪獣が大集合！ 現代のアーティスト・漫画家・ゲームデザイナーたちによるクリーチャー制作も紹介し、妖怪やモンスターの源泉にある想像と創造の力を探ります。

会期　11月26日(火)まで
会場　特別展示館

■関連イベント

研究公演
「能と怪異(あやかし)」

能楽師、辰巳満次郎氏とアフリカの仮面結社を研究してきた吉田憲司館長が、異界と現界のはざまに立ち現れる精霊・鬼・霊獣などの存在を具現する面と演者について対談します。

日時　9月29日(日)
　　12時30分～16時(開場12時)
会場　本館1階エントランスホール
※事前申込不要(当日先着順／定員250名)、参加無料

連続講座
「みんぱく×ナレッジキャピタル 想像界の奥へ」
第2回
カフェ・ラボ対談
「常ならざる音 ――見えないものを展示する」

日時　10月8日(火)19時～20時30分
　　(受付開始18時30分予定)
会場　CAFE Lab.(グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル1階)
登壇者　山中由里子(本館 教授)
　　辻邦浩(本館 特別客員教授)
※要事前申込(定員50名 中学生以上)、要ドリンク代500円

連続講座
「みんぱく×ナレッジキャピタル 想像界の奥へ」
第3回
みんぱく特別展示ツアー
特別展「驚異と怪異 ――想像界の生きものたち」見学ツアー

実行委員長が特別展の見どころ、裏話を熱く語りながらご案内します。

日時　10月20日(日)11時～12時30分
　　(受付開始10時30分)
会場　特別展示館ほか
※要事前申込(定員30名 中学生以上)、要特別展示観覧券(団体料金)

トゥピラク
(グリーンランド)

KAKENHI
ひらめき☆ときめきサイエンスワークショップ
ゴミから生まれる異音獣！ 不思議なケモノはどんな音？ 不思議な音は何に見える？

「不思議なケモノはどんな音？」

幻獣、怪獣を描いた展示物を観賞したあと、そのイメージを音にします。渡辺亮氏の指導のもとに廃材から楽器を作り、みんなで演奏します。視覚に障害のある人も歓迎します。

日時　11月2日(土)
　　13時30分～16時30分
　　(受付開始13時)

「不思議な音は何に見える？」

渡辺亮氏の演奏を聞き、その不思議な音から想像をふくらませて衣装をつくり変身します。思い思いの異音獣に変身して、みんなで大行進します。

日時　11月3日(日・祝)
　　13時30分～16時10分
　　(受付開始13時)
講師　渡辺亮(パーカッショニスト)
　　山中由里子(本館 教授)
会場　特別展示館休憩所(地下1階)、特別展示場、特別展示館前、前庭
対象　小学5年生・6年生
※要事前申込(定員各日24名、応募者多数の場合は抽選)、参加無料
※保護者の方が見学される場合は、特別展示観覧券が必要です。
※8月29日(木)より応募受付開始

企画展
「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年 ――「みられる私」より「みる私」」

片倉もとこ(本館 名誉教授)が半世紀前に撮影した写真を手がかりに、色鮮やかな物質文化からサウジ女性の生活世界の変遷をたどります。

会期　9月10日(火)まで
会場　本館企画展示場

花飾りのついたクフル(顔料)容器

●みんぱく無料シャトルバスのご案内

大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんぱくの間の直通送迎バスを特別展「驚異と怪異」の会期中に運行します。

運行日　11月26日(火)までの土曜・日曜・祝日
　　1日11往復、所要時間10分、無料
運休日　平日、11月2日(土)、3日(日・祝)、4日(月・休)、16日(土)、17日(日)
※万博記念公園でイベントが開催される場合は臨時に運休することがあります。詳細は本館ホームページをご覧ください。

※各イベントについてくわしくはみんぱくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

お問い合わせ(本館 広報係)
電話　06-6878-8560／FAX　06-6875-0401
http://www.minpaku.ac.jp/

みんぱくゼミナール

日時　9月21日(土)13時30分～15時(13時開場)
会場　本館セミナー室
※メイン会場が満席の場合は中継会場をご案内します。
※申込不要、参加無料
※参加券を12時30分からインフォメーション前(本館1階)にて配布します。

第495回
奴隷交易の世界史 ――サハラ以南アフリカと世界

講師　鈴木英明(本館 助教)

奴隷制やそれに類似した制度は世界の各地にみられます。こうした制度の多くは、社会の外部から他者を連れてくることで成立するものでした。今回は、特にサハラ以南アフリカから輸出された奴隷交易に注目し、世界史的な観点からこの交易の実態を考えます。

ガーナ・エルミナ城の奴隷留置場

みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域／国の最新情報」「みんぱくの展示資料」について分かりやすくお話しします。

9月1日(日)14時30分～15時15分　特別展示館
特別展「驚異と怪異 ――想像界の生きものたち」
話者　山中由里子(本館 教授)

9月8日(日)14時30分～15時30分
本館ナビひろば、オセアニア展示場
アオテアロア／ニュージーランドへの長い旅路 ――オセアニア大航海
話者　ピーター・J・マシウス(本館 教授)

10月6日(日)14時30分～15時　特別展示館
特別展「驚異と怪異 ――想像界の生きものたち」を巡って
話者　笹原亮二(本館 教授)
※申込不要、参加無料(要特別展示または展示観覧券)

●無料観覧日のお知らせ

9月14日(土)は、本館展示を無料で観覧いただけます。**ただし、特別展の観覧は有料となりますので、ご注意ください。**

刊行物紹介

■信田 敏宏 著
『家族の人類学――マレーシア先住民の親族研究から助け合いの人類史へ』
臨川書店　2,800円(税別)

マレーシアの先住民オラン・アスリの歴史を紐解きながら、彼らの親族システムの成り立ちを詳述する。そして、現在の調査村の親族組織とNGOなどの新たな関係性について分析を行なう。人類にとって家族とは何か、親族とは何かを問う試論的書。

■西尾 哲夫 訳
『ガラン版 千一夜物語』第1巻
岩波書店　3,500円(税別)

18世紀初頭、フランス人アントワーヌ・ガランがフランス語に翻訳しベストセラーになった『ガラン版千一夜』を日本で初めて完訳。ガランがいなければ私たちはアラジンを永遠に知らなかった。アラビアンナイトの原点、ファンタジーの源泉が新訳で蘇る。作家の森見登美彦氏推薦！ 全6冊順次発売。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く） FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会

会場　本館第5セミナー室(当日先着順・定員96名)
※会員無料(会員証提示)、一般500円

10月の友の会講演会は第2土曜日に開催します。

第493回　10月12日(土)13時30分～14時40分
【特別展「驚異と怪異 ――想像界の生きものたち」関連】
対談 幻獣！――そこに〝在る〟不思議な生きもの
話者　湯本豪一(妖怪・幻獣研究者)
　　山中由里子(本館 教授)

人類は、この世のキワにいるかもしれない異形のものや妖怪の類の姿を、心の内に生み出してきました。そのなかには、人魚や河童など、実在すると考えられていた不思議な生きものもいます。こうした幻獣は人びとの好奇心を刺激し、その存在の物的証拠が時に捏造されたりもしました。「物」としての幻獣は崇められたり、薬とされたり、見世物とされてきました。幻獣や妖怪など〝不思議〟を追い求め、集めてきた湯本豪一さんを招いて、幻獣の世界に分け入ります。

※講演会終了後、話者の案内のもと特別展を見学します(40分／要会員証もしくは特別展示観覧券)。湯本さんのコレクションを展示する「驚異の部屋」もお楽しみください。

東京講演会

第127回　9月14日(土)13時30分～14時40分
会場　国立音楽大学7号館2階多目的室(定員60名)
※要事前申込、会員無料(会員証提示)、一般500円
世界の楽器を探る
講師　福岡正太(本館 准教授)

第82回体験セミナー
ものの怪道をゆく ――稲生物怪録と小泉八雲を歩く
日程　10月13日(日)～14日(月・祝)
　　【申込締切：9月18日(水)】

第94回民族学研修の旅
ひと、もの、くにのはじまりを探して ――陸路で行くベトナム・ラオス
日程　11月22日(金)～12月2日(月)
　　【申込締切：10月11日(金)】

想像界の生物相

刺繍に見るミャオ族の宇宙

民博 名誉教授 横山 廣子

資料名 女性用前掛け（ハレ用）
＊特別展「驚異と怪異 ── 想像界の生きものたち」で展示中（11月26日まで）

標本番号 H0226487

地域 中国

サイズ 縦 75cm ×横 68 cm

＊撮影：大道雪代

赤を基調とする刺繍が一面に広がる前掛けは、中国貴州省の東南部、施洞鎮のミャオ族の母親が娘の晴れ着用に縫い上げたものである。ミャオ族は地域ごとに華麗な民族衣装で知られるが、特に施洞鎮は刺繍の見事さで突出している。切り紙で作った型紙を布に貼り付け、その上から針を刺していく技法は、ミャオ族に広く見られるが、施洞では絹糸の撚りをほどき、一本を数本からときに一〇本以上にもわけて細くし、サイカチの実が原料の糊をつけて滑りを良くし、艶を出す。その糸を平縫いで布の裏表にわたしていくことで文様に細やかな光沢と厚みが生まれ、刺繍の迫力が増す。

しかし、手仕事の精緻な美しさもさることながら、個々の文様に目を凝らすと、奇想天外な姿やその躍動感に心を奪われる。

◆◆◆刺繍と歌による伝承◆◆◆

中央で龍が体をくねらせている。中国では龍は皇帝の象徴でもあり、明代ごろまでにその基本形が完成したとされる。中国の標準的な龍に見られる鋭い爪、鱗、体のトゲ、口に含んだ宝珠は、この龍にもある。しかし水牛の角がはえていて、そもそも雰囲気がまったく違う。そこには水牛の力に頼ってきたミャオ族の農耕生活が色濃く反映されており、龍は水を司るのみならず、農業神、祖先神として重要な信仰の対象となっている。

龍の左右と、前掛け全体のそこここに蝶が刺繍されている。ミャオ族が歌い継いできた起源神話では、人間や動物など万物を産んだのは「蝶々母さん」である。最初にフウの樹（ユキノシタ目の被子植物）から虫が生まれ、蝶となって一二個の卵を産み、そこから生き物がかえる。歌い手によって生き物の顔ぶれに出入りがあるが、人間の祖先や雷神とともに必ず歌われるのは龍や虎、水牛、蛇である。ミャオ語でチーユーとよばれる霊鳥も起源神話に登場し、辛抱強く何日も卵を抱え、生き物の誕生を助ける。前掛けの左右部分に花とともに四羽刺繍されている鳥は、このチーユーだという。

伝統的に文字をもたなかったミャオ族の場合、歌とともに刺繍がその超自然的世界観の伝承に大きな役割を果たした。

◆◆◆変幻自在な生き物たち◆◆◆

中国の伝統文化からの影響もうかがえる。前掛け最上段中央をはじめとして随所に見られる、ギョロ目で耳が左右に垂れ下がった獅子は、中国で一般的な獅子と造形的に類似している。前掛け左右の花鳥を刺繍した部分の中心の花は、ミャオ族のあいだでも牡丹あるいはコウシンバラと意見がわかれるところだが、蔓の曲線に花を巻き込んでしまう牡丹唐草などの中国的文様の影響が感じられる。

下から二段目に刺繍されている象は、長江流域の新石器時代の地層から化石で発見されてはいるが、現在、貴州省には生息していない。しかし起源神話で一二個の卵のひとつから生まれたと歌われることがあり、古い時代の刺繍図柄にもある。象の文様は中国から導入されたとは言い難く、謎が残る。他方、刺繍に登場する動物たちの多くは、ミャオ族の周辺に実際に生息している。蝦、魚、蛙など水中生物が多いのは、施洞が清水江沿岸にあり、水田や水路も多いことと関係があろう。しかし、近くで観察できるそれらの生き物でも、ミャオ族の刺繍は写実的ではない。白い布地の上の刺繍は、どれもが装飾的なヴァリエーションに富み、独特なユーモアを有する。

刺し手は自在に細部を変化させるのをあたかも楽しんでいるかのようである。その最たるものは龍で、水牛の角や手足が消えていたり、魚のような尾びれがついていたりと中央の龍とは相当異なる形のものがたくさん刺繍されている。この前掛け以外の施洞のミャオ族の刺繍では、鳥やムカデ、蛇、蚕、魚、人面、葉っぱなどの造形を組み込んだ龍が見られる。龍は変化すると人びとは言う。それは彼らの超自然的宇宙そのものなのである。

みんぱくレプリカめぐり

民博 機関研究員　末森（すえもり） 薫（かおる）

ロゼッタ・ストーンと夢の碑（エジプト、H0037549、H0037550）

複製した岩壁に描かれたドリーミング（オーストラリア、H0140421）

恵比須（熊本県、H0037120）
左頁の写真参照

モアイ（チリ、H0009519）

その他のレプリカ資料（一部）
①アステカの暦石（H0009490、アメリカ展示）
②パン各種（ヨーロッパ展示）
③儀礼用家屋の柱（H0202338ほか、東南アジア展示）
④食膳（H0095241ほか、朝鮮半島の文化展示）
⑤タシュケントの民家（模型縮尺 1／10）（H0105532、中央・北アジア展示）
⑥熊送り用祭壇模型（H0273159、アイヌの文化展示）

博物館や美術館で「レプリカ」あるいは「複製品」と書いてあると無意識にとおり過ぎてしまう、そんな経験はないだろうか。レプリカ（replica）は、イタリア語で「繰り返し」を意味する。元々は、原作の作者が同じ方法や形式で製作したものを指したが、現在では作者は問わずに原作を模したもの一般を指し、複製品と同義で用いられる場合も多い。

みんぱくの展示場には、レプリカ（複製）として展示されている資料が少なからずある。それらは、現地から離すことのできない信仰の対象や、国外にもち出すことが禁じられている考古資料、そのままでは置くことができない食料の類いであったりする。ひとえにレプリカといっても、その背景や作られ方はさまざまである。ここでは、考古的性格を有するレプリカ資料四点の来歴を追ってみたい。

モアイ像

モアイは、太平洋の孤島であるイースター島で作られた巨石像である。チリ政府によって輸出が禁じられているモアイを展示するため、一九七七年にみんぱくはレプリカを購入した。一九五〇年代後半に同島で考古調査をおこなった人類学者ウィリアム・ムーロイ氏の指導・監修のもとで製作されたレプリカである。約九〇〇体あるといわれるモアイはそれぞれで特徴が異なり、胴体まで表現されたものや帽子をかぶるものもあるが、みんぱくのレプリカは顔部のみで表現されている。イースター島のモアイの多くは、「アフ」とよばれる高台に、海を背に、島を向く形で設置されたという。みんぱくのモアイは一段高い位置から展示場を見つめている。

アボリジニの岩壁画

オーストラリアの先住民アボリジニは数万年前から岩に絵を描いてきた。一九八六年、神戸市立博物館で開催された「狩人の夢――オーストラリア・アボリジニの世界」展に合わせて、オーストラリアから芸術家のボビー・ナイアメラ氏を招き、ドリーミング（創世神話）に登場する動物や精霊、狩人などを描いた岩壁画の制作がおこなわれた。岩壁は、オーストラリア北部アーネムランドの聖地イニャラック山をモデルに作られた合成樹脂製である。画は芸術作品、岩壁はレプリカという二面性を有する特異な資料であり、展示場でも存在感を示している。

古代エジプトの石碑

言語展示場の入口には、古代エジプトの石碑のレプリカがふたつ置かれている。いわずと知れたロゼッタ・ストーン、そして夢の碑である。一九七八年に言語展示のシンボルとして購入された。ロゼッタ・ストーンは、一七九九年にエジプト北部のロゼッタにある城塞から発見された石碑である。碑文には、神聖文字（ヒエログリフ）と民衆文字（デモティック）、ギリシア文字の三種類の文字が併記されており、古代エジプトの文字を解読する鍵となった。実物は大英博物館にあり、石碑の発見現場や現地の博物館には、みんぱくと同様にレプリカが展示されている。

夢の碑はギザの三大ピラミッドエリアにある石碑である。古代エジプト第一八王朝第八代ファラオのトトメス四世（在位 前一四〇〇年～一三九〇年ごろ）は、砂に埋もれるスフィンクスを掘り起こせば王位につけるというお告げを夢のなかで聞き、スフィンクスを掘り起こした。そして、その内容を刻んだ石碑をスフィンクスの足元に建てた。現地では、スフィンクスに近づくことが制限されているため、石碑を間近に見ることはかなわないが、みんぱくでは、レプリカに刻まれた図像や文字をはっきりと確認できる。

レプリカのレプリカ

レプリカといえども、博物館の重要な資料であり、それぞれに物語がある。ときに、実物からは失われてしまった情報を含んでいる場合もある。レプリカのもつ背景や情報を探りながら、みんぱくの展示場を回ってみるのも一興であろう。

近年、三次元計測機器や三次元プリンターの普及により、レプリカ製作の目的や方法が多様化してきている。みんぱくでは、資料を三次元プリントし、視覚障害をもつ方が触って学ぶことのできる案内パックの作成を進めており、なかにはレプリカ資料を三次元プリントし、レプリカのレプリカとして活用する例もある。レプリカは展示のみならず、博物館資料の研究や保存にもさまざまに用いられており、今後その存在感はより一層増していくに違いない。

恵比須（左）とその3次元プリント（右）
（恵比須は2019年9月ごろに展示場へ再演示予定）

シネ倶楽部

一〇〇年前のボクシング

樫永真佐夫（かしなが まさお）
民博 超域フィールド科学研究部

「チャップリンの拳闘」

原題：The Champion

1915年／アメリカ／サイレント／31分／DVDあり
監督：チャールズ・チャップリン
出演：チャールズ・チャップリンほか

ボクシングを題材にした映画は多い。一〇〇年以上前からある。そんな古典的作品のひとつが「チャップリンの拳闘」である。

ある日、ボクサー志望のチャップリンは、タイトルマッチ挑戦を控えた選手のスパーリングパートナー募集の広告を目にする。応募した彼は、なんと馬の蹄鉄（ていてつ）を仕込んだグローブで選手を殴って失神させ、タイトルマッチ挑戦のチャンスを手に入れてしまう。

タイトルマッチは、チャンピオンを相手にチャップリンが狭いリング内を駆けまわり、倒し倒されのシーソーゲーム。最後はリング内に乱入した犬の加勢のおかげで逆転勝利する。しかも思いを寄せていた女性とも結ばれる。

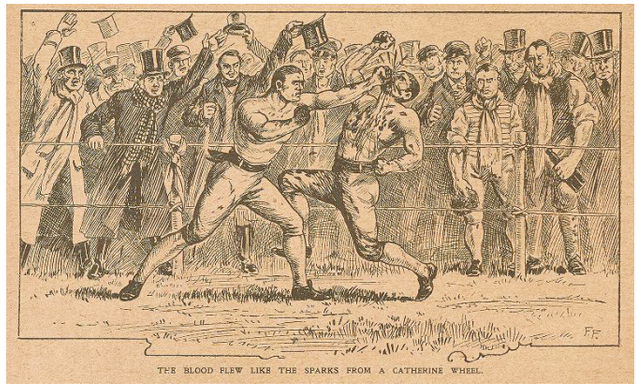
笑いのツボは激しい転倒を繰り返すドタバタ劇にあるが、わたしには近代ボクシング成立以前のゲームの面影が透けて見えるのもおもしろい。

流血と賭博

日本でボクシングは拳闘ともよばれてきたが、原題にboxing（ボクシング）の文字はない。The Champion（ザ・チャンピオン）である。最初のテロップは「ボクサーを志すチャーリー」と訳されているが、ここにもboxer（ボクサー）の文字はない。pugilist（ピュジリスト）である。

ピュジリストとは、古い拳闘競技の選手のことである。近代スポーツとしてのボクシングは、イギリスで一八六七年にクイーンズベリー・ルールが制定され成立したとされている。端的に言うと、それ以前に制定されたルールによる拳闘競技がピュジリズムで、その興行はプライズ・ファイトとよばれた。賞金だけをめぐって闘ったからである。勝敗に関係なく双方が試合報酬（ファイトマネー）を得る現在とは異なり、負けたら無報酬だった。一方、観客たちは殴り合いの流血にまで金を賭け、賭博に熱狂した。

映画に登場するシルクハットの白ヒゲ紳士は賭博の元締めだろう。どうやらチャップリンに金を握らせて負けさせたいらしい。じつは一九世紀末にプライズ・ファイトが急激に衰退した大きな理由のひとつが、八百長の横行であった。八百長は選手のパトロンに対する裏切り行為に他ならなかったから、パトロンたちはしまいに出資をやめ興行が成立しなくなった。



ピュジリスト同士が素手で殴り合ったプライズ・ファイトの観客は、流血をも賭けの対象にした
（出典：*Famous fights: past and present*, 1901, London, p.366）

長ズボンのピュジリスト

タイトルマッチのシーンに、今の視聴者は違和感を覚えるかもしれない。リング上のチャンピオンも挑戦者も長ズボンをはいているからである。

映画から二〇年あまり遡る一八九二年、クイーンズベリー・ルールによる初の世界タイトルマッチがアメリカでおこなわれた。不敗神話を誇っていたピュジリスト、ジョン・L・サリヴァンと、銀行員でもあったジェイムズ・J・コーベットの対戦であった。結果は、長ズボンのピュジリストがショートパンツのボクサーに二一ラウンドKO負け。流血と賭博に象（かたど）られていた過去は、長ズボンごとボクシングの世界から遠ざけられた。

一ラウンド三分、インターバル一分のラウンド制を定めたのも、クイーンズベリー・ルールが最初である。じつはピュジリズムにもラウンド制はあった。だが、ラウンドは時間で決められていたのではない。一方が倒れたらインターバルをとったのである。双方が精根尽き果てるまで闘って、最後に立っているのが勝者であった。

ピュジリズムではインターバル中に酒をがぶ飲みすることさえあった。試合にそなえて練習中のチャップリンもビールをあおっている。今のボクシングではあり得ない。

黒人初の世界チャンピオン

アメリカの大衆にボクシングは大人気だった。ちょうどこの映画が作られたころはジャック・ジョンソン（一八七八～一九四六）が、ヘビー級では黒人初の世界チャンピオンとして君臨し、白人たちの憎悪を一身に集めていた。しかし映画封切り後まもない一九一五年四月五日、彼はKO負けを喫し、それから白人のチャンピオンの時代が二〇年以上続く。黒人ボクサーには挑戦するチャンスすら与えられなかったからである。彼らは差別とも闘わなくてはならなかった。モハメド・アリ（一九四二～二〇一六）が闘い続けたように。

映画のなかのボクシングジムにも鉄アレイやダンベルの他、パンチングボールや縄跳びがある。ただし現代のジムとは異なり、リング（当時はロープは2本）はなく、その代わりに器械体操の器具が充実していた
（東拳ボクシングジム、2014年）

ことばの迷い道

真実はふたつ?

肥後（ひご） 時尚（ときひさ）
関西大学大学院博士後期課程

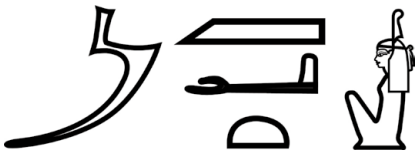
古代エジプト人は、「ふたつ」が好きである。彼らは世界が対になるふたつの概念でできていると認識していた。例えば、彼らはエジプトを「ふたつの国」や「ふたつの岸」、「上（かみ）エジプトと下（しも）エジプト」と表現し、世界を東方と西方、現世と死後の世界、昼と夜などの組み合わせでとらえていた。この「ふたつ」へのままならないこだわりは、古代エジプト語にもはっきりとあらわれている。英語の名詞には単数形と複数形があるが、古代エジプト語の名詞には単数形と複数形に加えて、物事がふたつあることを示す「双数形」が存在する。先ほどの「ふたつの国」や「ふたつの岸」はこの双数形で示される。

世界をふたつにわけるとらえ方は、一見するとわたしたちにも容易に想像できそうな印象を受ける。しかし、古代エジプト人はわたしたちの常識ではひとつやふたつといった数では計り知れないものまで「ふたつ」でとらえていることがある。その代表的な例が、「真実」の概念である。

古代エジプト語で「真実」や「正義」、「公正」という概念は、「マアト」（*mꜣʿt*）とよばれる。マアトは古代エジプトにおいて重要な概念であり、数多くの史料に単数形（*mꜣʿt*）で示されている。また、ときには真実や正義を司る女神の姿としてもあらわされる。しかし、有名な「死者の書」の死者の裁判の場面では、どういうわけかマアトは単数形ではなく双数形マアティ（*mꜣʿty*）で表現され、真実の女神も二体となってあらわれる。つまり、この場面では真実が「ふたつ」示されているのである。数でとらえる事の難しい抽象概念でさえもあえて「ふたつ」あると認識した古代エジプト人の感覚は、ただただ不思議でならない。

「なぜ真実がふたつあるのか」という謎に対しては、多くの学者が興味を示し、一〇〇年以上も前からさまざまな解釈が提示されてきた。ある人は、「現世の真実」と「死後の世界の真実」であると考え、また別の学者は太陽と月の隠喩であると考えている。「ふたつの真実」の語は実際には双数形ではなく、ひとつのままと考える学者もいるが、「ふたつの真実」がことばだけでなく、二体の女神の図像で描写されていることから、確かに彼らの思想のなかに真実はふたつあったのだろう。残念ながら、この議論は今なお最終的な結論にはいたっていない。先人が示した解釈のなかに答えがあるのかもしれないし、まだわたしたちの知らない深い意味が「ふたつの真実」に隠されているのかもしれない。いずれにせよ、古代エジプト人の「ふたつ」へのこだわりはわたしたちの想像を簡単に超えるものであり、彼らの思想をより正確に理解をするための道のりは果てしなく続きそうである。

「ふたつの真実」（*mꜣʿty*／双数形）



「真実」（*mꜣʿt*／単数形）

月刊みんぱく 2019 9月号

編集後記

本号の表紙に民博の展示場の写真が含まれていることに、お気づきの読者はいただろうか。アフリカ展示の「歴史を掘り起こす」セクションにある、奴隷貿易という展示の写真だ。特集「奴隷展示は問う」は、けっして他所事（よそごと）や他人事ではない。民博にある、誰かの足に実際に付けられていたのかもしれない錆（さび）ついた足かせと鎖。それらが時空を超えて発する無言のメッセージに、わたしたちは何を思い、子どもたちに何をどう伝えるのか。本特集がそうしたことを考えるきっかけや手掛かりになればと思う。

奴隷制のその後は、図らずも本号のシネ倶楽部M「100年前のボクシング」が引き受けてくれる。黒人初の世界チャンピオン誕生後、白人のチャンピオンが20年以上続いたのは、黒人ボクサーに挑戦するチャンスが与えられなかったからだが、著者によれば、それは白人チャンピオンが黒人との対戦を拒否できるカラーラインという差別制度が、ここにも存在したからだという。

つくられた展示や映画から文化や歴史を語る意義に眼を開かされる論稿が目白押しとなった。他方、民博に奉職する「わたしたち」にとっては、そうした展示や（民族誌）映画をつくる側にもなる責任を再認識させられる機会となった。（南真木人）

●表紙：上から時計回りに、
1：マージーサイド海事博物館の正面にあるプレート（撮影：井野瀬久美恵、2012年）
2：ガンビア・クンタキンテ島へ向かう波止場に据え置かれた像
（アルブレダ、撮影：鈴木英明、2018年）
3：ブラジル・ハウスの中庭の壁に描かれたグラフィティ（撮影：鈴木茂、2018年）
4：民博のアフリカ展示にある「奴隷貿易」のコーナー
5：スリナム博物館（撮影：吉田信、2005年）

次号の予告

特集

「メキシコのアルテ・ポプラル」（仮）

みんぱくをもっと楽しみたい方のために

国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。
毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

維持会員・正会員
『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加　など

ミュージアム会員
『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加　など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もございます。目的にあわせてご利用ください。

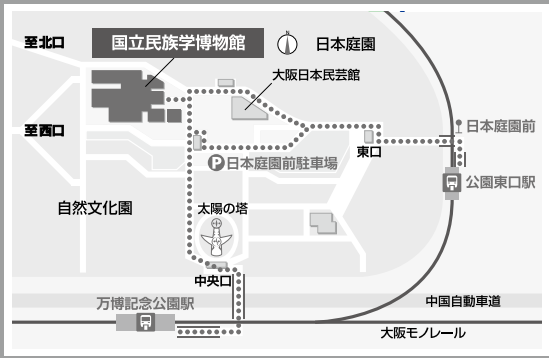
詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話 06－6877－8893／平日9:00～17:00）

月刊みんぱく 2019年9月号
第43巻第9号通巻第504号　2019年9月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　園田直子
編集委員　南真木人（編集長）　上羽陽子　齋藤晃　菅瀬晶子　三島禎子　吉岡乾
デザイン　宮谷一款　長岡綾子
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ　http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック　https://www.facebook.com/MINPAKU.official
みんぱくツイッター　https://twitter.com/MINPAKUofficial
みんぱくインスタグラム　https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/
みんぱくYouTube　https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

みんなのはくぶつかん みんぱく

MINPAKU

特別展「驚異と怪異――想像界の生きものたち」関連

ユニークなオリジナルグッズが目白押し！

開催中の特別展「驚異と怪異――想像界の生きものたち」のオリジナルグッズができました。特別展で展示されている世界の不思議な生きものをデザインしたもので、ここでしか手に入りません！ ぜひこの機会にお気に入りの一品を探してみませんか？

※モチーフ拡大

※モチーフ拡大

T シャツ〈2 種類〉

3,000 円

サイズ：（左）S ／ M ／ L　（右）S ／ M ／ L ／ XL

エコバッグ

680 円

サイズ：縦 39cm ×横 33cm

手ぬぐい

800 円

サイズ：縦 90㎝×横 35㎝

五十嵐大介原画
オリジナルエンブレム入り

ホーローマグカップ

1,600 円

特別展図録

『驚異と怪異
――想像界の生きものたち』

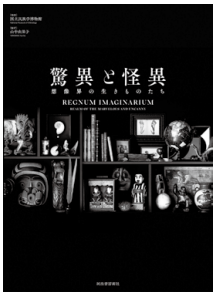
2,700 円

監修：国立民族学博物館

編者：山中由里子

仕様：B5 変形判　240 頁

発行：河出書房新社



2020 年 国立民族学博物館
オリジナルカレンダー

驚異と怪異
――想像界の生きものたち

1,200 円

国立民族学博物館友の会
会員価格 1,080 円

監修：山中由里子

サイズ：25㎝× 25㎝

仕様：オールカラー　28 頁　中綴じ

《お問い合わせ》 **国立民族学博物館ミュージアム・ショップ**
email : shop@senri-f.or.jp　水曜日定休

※表示価格はすべて税抜きです。別途、消費税が必要になります。
※実際の商品とデザイン仕様が異なる場合があります。